

東京

文學同志會藏版

# ふる郷集

入江雅次郎著

253

43

088101-000-3

特64-11

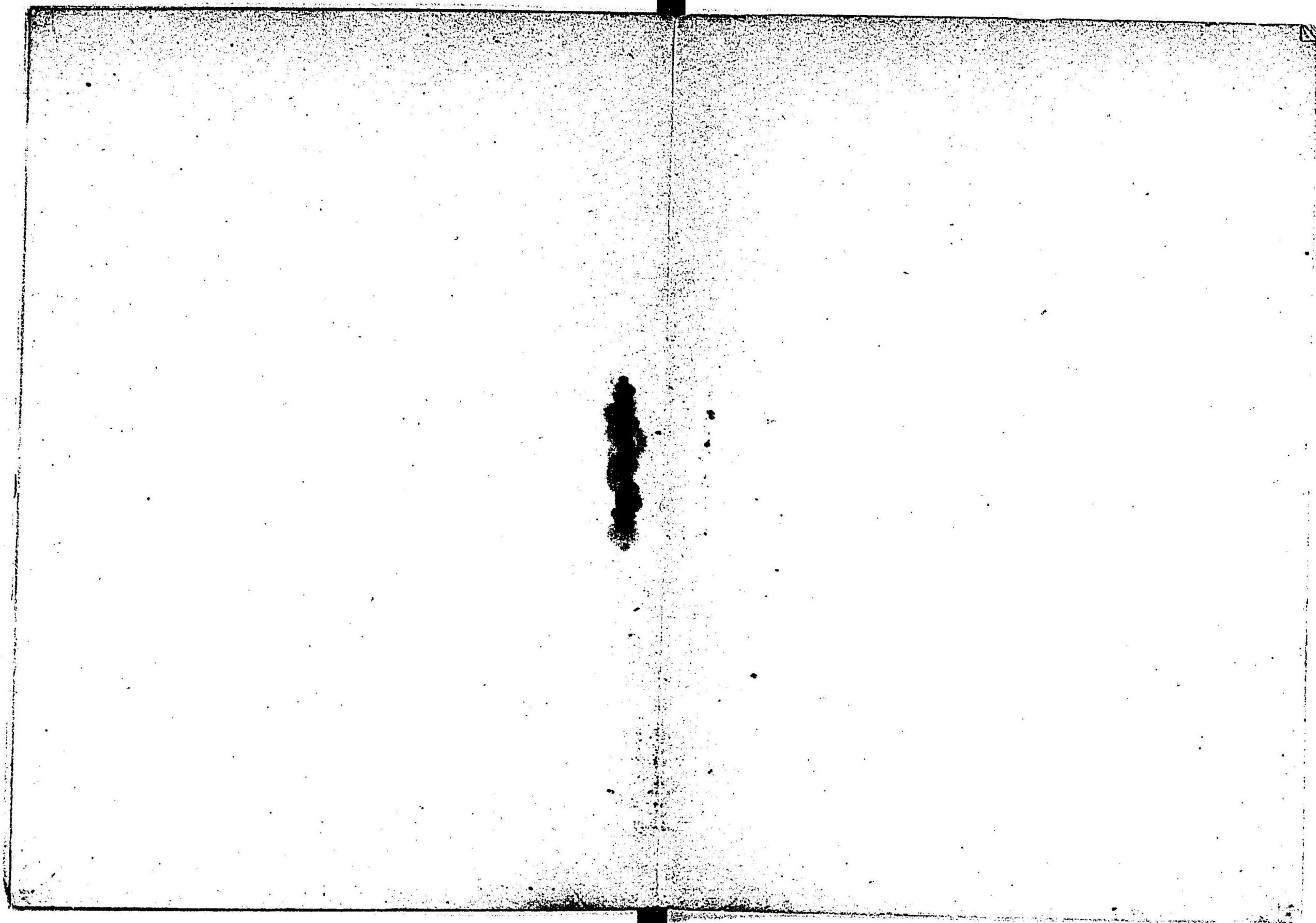
ふる郷集

入江 花錦 / 著

M38

DBG-0198









山乃人の君  
まゐらす

著  
者



目次

第二章	第一章	ドラ女(テニソン卿原作)	其二 秋の静肅に	其一 夕榮揺るる	秋韻	名無草	花の音星の聲	磯に佇みて
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二八	一七	一七	一四	一三	一三	九	六	一

—Dora said again :  
 “Do with me as you will, but  
 take the child,  
 And bless him for the sake of  
 him that's gone!”

So saying, he took the boy that  
 cried aloud  
 And struggled hard. The wreath  
 of flowers fell  
 At Dora's feet. She bow'd upon  
 her hands,  
 And the boy's cry came to her  
 from the field,  
 More and more distant.—She  
 bow'd down  
 And wept in secret; and the  
 reapers reap'd,  
 And the sun fell, and all the land  
 was dark.

第三章	三四
第四章	四四
第五章	四八
新婚を祝して	六〇
アルリン公の嬢(トーマスキヤンベル原作)	六四
手を把りて	七三
呪咀の焰(パラダイスロストの一節)	
其一	七八
夢語の卷	
其二	九三
勅使の卷	

其三	一〇三
別居の卷	
孤兒に寄す	一二一
時移らへば	一三八

目次終

ひとこと

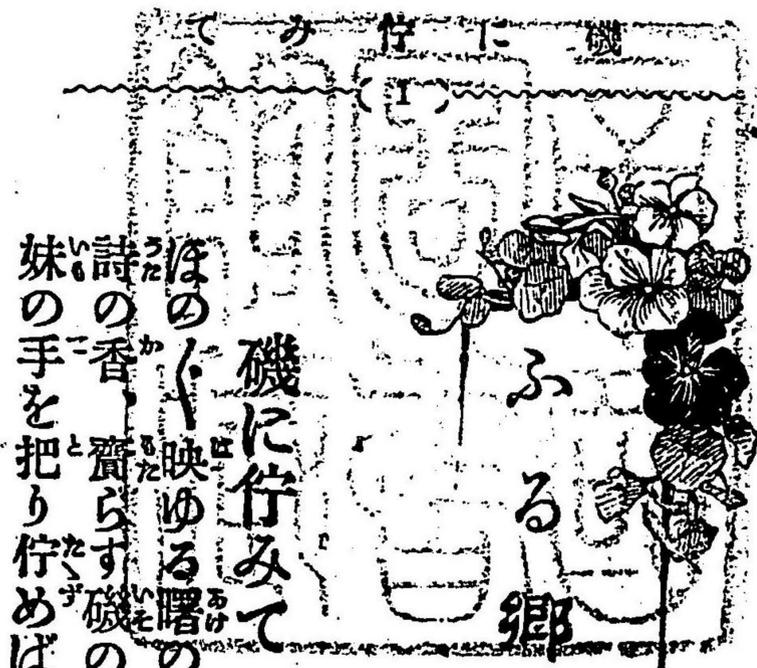
ゆくりなく想はぬ空に憧れの夕、  
ふと宿りて生れにし此の稚子、未だ  
はぐゝみの日數さへ淺きを、故あり  
て、あたら人事こちたき市に旅立た  
しめん。とす。げに氣遣はしき極みに  
なむ。さはいへ、情け厚き世の人たち  
はしも、無下にはさいなみ給ふまじ

かと、ひたすらそれをのみ心頼みに  
して………

あはれいたはしの稚子よ、あどけ  
なき笑まひ漏らしえじとも、真心ゆ  
盗るゝ涙に涸れて、ひと日も疾く、胸  
あたゝかき君が愛のみ手に、安らけ  
く憩ひの夢むすびてよ。

生別の朝

花錦生



ふる郷集

磯に行みて

ほのく映ゆる曙の空  
詩の香、齎らす磯の上  
妹の手を把り佇めば

入江花錦著

平和は廣し、春の海。

星の宮殿の舞姫の  
眞白の衣の垂るゝにや  
おぼろに霞の立ち籠めて  
抱けるに似たり、空と海。

妹は漏しぬ頬の笑  
余は握りぬ妹の袖。

浮ぶ木葉か、五六艇  
霧に漕ぎ入る蟹小舟  
影は消えゆき細やかに  
響きて聞ゆ、戀の唄。

折から彩る旭の光  
白金の弦、黄金の矢  
映光美はしく七色の  
輝きの領、三千里。

~~~~~(4)~~~~~

妹は眺めぬ海の面  
余は仰ぎぬ天の彩。

温るき微風たち初めて  
松の梢の琴の絃  
調や低く奏てつゝ  
海面の静肅、ほころびぬ。

雄の浪さと寄せ、岩の上  
華と亂れて白く飛び

~~~~~(5)~~~~~

唯の浪そと寄せ、洞の中  
詩と曲たて高く呼ぶ。

妹は謠ひぬ幸の歌  
余は吟みぬ愛の曲。



花の音星の聲

緑えびの絲いとの琴ことに倚より  
 快け樂らくの曲うたを奏かなでんの  
 希のぞ望みは絶たえてよすがなみ  
 つらき運さた命めに笑あまひつゝ  
 深み山やまに入いりし愛はしの君きみ  
 聽きけよ、花はなの音ね、星ほしの聲こゑ。

やさし蓮す花みはいと清きよく

『此この世よを外よそに草くさの廬いほ  
 ひすびし詩うた人ひとよ わが涙なみだ  
 御おん身みの袖そでに掬くみましね  
 慰なぐさ藉せきの神かみ泉いづみ、湧わき出いで、  
 洒すぎ得うるらん、胸むねの垢あか』。

ゆかし薔しやう薇ういはいと高たかく  
 『此この世よを外よそに草くさの廬いほ  
 ひすびし詩うた人ひとよ。わが薫かそり  
 御おん身みの心こゝろに染しめましね

希望の光明、映え出て、  
拂ひ得るらん、胸の雲。

なつかし星はいと強く  
「此の世を外に草の廬  
ひすびし詩人よ、わが装  
御身の肌に彫りましね  
理想の樂園、浮き出て、  
宿し得るらん、神の影。」

——さる君の許に遣はせしふみの中に——

名無草

春あさまだき花の園  
紅の薔薇を手柝らんと  
彼のも此のものに憧れて  
ひたさまよへば、名無草  
此の身の顔を眺めつゝ  
やをら語りぬ、呟きぬ。

「春の潮に乗りつゝも

胸のうちはも夏の午  
されど面わや冬の色、  
妻れ瘦せてぞ在す君  
此の身をみ手に摘みましね  
しかさまよひて在すより』

われは應へぬゆくりなく  
『名もなく在す草の君  
御身を嫌むにあらねども  
摘みまゐらせじ、摘み取らし、

ひた慕ひしきに慕ひしける  
理想の君ぞ——紅薔薇！』

かさねて言ひぬ名無草  
『艶香なけども花無けど  
御身がみ胸にまゐらする  
同情に熱き吾が涙  
せめては掬みませ！刺ぞなき  
小さき胸に溢るとよ。』

あまりに切の言の葉に  
覺えず薺と抱きつき  
われは接吻しぬ草の唇  
斯くて心の雲はれて  
焰もとみに静まりて  
あはれ癒えたり胸の傷。

——さる君に送りし文のはしに——



秋 韻

其一

夕榮揺るゝ

夕榮揺るゝ秋の暮  
亡君か永眠れる埜の許  
名残しどろに立ち出で  
歸るや青き苔の徑。

傍に立てる草の廬  
主人や誰ぞとよとなへば  
應は、木の葉堆さ  
篋を漏るゝ水の音。

其二

秋の静肅に

秋の静肅に鎖さるゝ  
水蒼黒さ池の畔

黙して孤身わが立てば  
水は語りぬ、呷さぬ。

「手弱女こゝに投身して  
怨恨の波の起ちしより  
飛ぶや蛙の音も稀に  
あゝ寂びたりな己が面。

あゝ寂びたりな己が面  
それにも勝りもの凄く

顔色なき君が胸の中  
如何なるものか宿りたる。』

されど余なほ黙すれば  
そよ風たちて波あれて  
薄はさわにをののきて  
寂寥いよ、迫り來ぬ。



ドラ女

第壹章

(一)

農夫アランはウイルヤム  
ドラの二人と諸共に  
賤が伏屋に棲いける  
ウイルヤム、渠の養育見  
ドラ女は渠の姪なりき。

アランは常に彼の二人  
いとふさはしき對者としても  
打ち眺めつゝ胸の中  
屢想へらく「渠等をば  
樂しき妹脊と結ばなん」。

いてやドラ女は悉く  
其の身の叔父の胸の如  
同じ想を懷きつゝ  
將來かけて窈やかに

ウイルヤルをぞ戀慕ひける。

されどもあはれ若人や  
常に彼女と諸共に  
同じ家内に接へる身  
縁結ばんのドラ女とも  
想はざりけり、ウイリヤム。

(二)

ある日の事よ、ウイリヤム

招きてアラン語らひき  
「吾が見よ、此の身は年晩く  
娶りしかども死なん前  
孫抱かえを願ふ哉。」

されば、此身は爾が婚姻に  
心を常に止めしよ、  
いでやドラをば視守りね  
彼女はいと艶しき  
齡に似げなくつゝましよ。

彼女は己が弟の娘  
曾てはしなく弟と吾  
論争ひ別れつ。外つ國に  
渠死しければそが爲に  
餘育みたりし、その娘ドラ。

爾が妻と彼女をば  
娶りねウイルヤム、此身こそ  
此の年頃の晝に夜に  
しかく妹脊になさましと

願ふ心の深ければ。

されど、否めるウイルヤム  
いとぞ言の葉短くも  
應答をなしぬ『吾が身には  
ドラをば娶り能はずよ  
誓ひてドラを娶らじ』と。

翁は怒り、固拳  
握りて言へらく『娶らじと』

汝！さは敢て答ふとは！  
免まれ、此の身の若き頃  
父の語は法命なりき。

今はた吾も然るべきぞ！  
そをし想へや、省みよ、  
あゝウイルヤム、一月を  
想ひ慮らし、吾が胸に  
叶ふ答を聽かせねよ。

「否<sup>いな</sup>ずば、いざや、己<sup>おの</sup>が身を  
造<sup>つく</sup>りましたる神<sup>かみ</sup>により  
宣告<sup>まをしわた</sup>さん、速<sup>すみ</sup>かに  
何處<sup>いづく</sup>へなりと立<sup>た</sup>ちて往<sup>ゆ</sup>け  
再<sup>また</sup>び吾<sup>わ</sup>が家<sup>や</sup>を訪<sup>おもと</sup>ひぞ」。

「さはれ、ウイ<sup>ウイ</sup>ルヤム狂<sup>くる</sup>はしう  
答<sup>こた</sup>をなしつ。唇<sup>くちびる</sup>を  
噛<sup>か</sup>みしめ、その場<sup>ば</sup>を立<sup>た</sup>ち去<sup>さ</sup>りぬ、  
渠<sup>かみ</sup>はドラ女<sup>むすめ</sup>を見る<sup>み</sup>ることの

多<sup>おほ</sup>きにいよよ厭<sup>いと</sup>ひける。

「さればしむけの無<sup>つれなき</sup>情<sup>なさ</sup>を  
ドラは忍<sup>しの</sup>びつ温<sup>しん</sup>和<sup>わ</sup>に、  
その月<sup>つき</sup>果<sup>は</sup>てぬ前<sup>まへ</sup>なりき  
ウイヤム、父<sup>ちち</sup>の家<sup>いへ</sup>を去<sup>さ</sup>り  
なりぬ、野<sup>の</sup>働<sup>と</sup>の日<sup>ひ</sup>雇<sup>よ</sup>人と。

「應<sup>やが</sup>て、半<sup>なか</sup>ばは戀<sup>こひ</sup>の爲<sup>ため</sup>  
半<sup>なか</sup>ばや父<sup>ちち</sup>への意<sup>い</sup>氣<sup>き</sup>地<sup>ぢ</sup>にて

働勞者の娘なる  
メーリー・モリソン 語らひて  
竟に婚姻を結びけり。

(三)

折から祝の鐘の音  
樂しく響きて聞ゆ時  
アランは姪を呼び寄せて  
語り聽かせぬ『處女子よ  
此の身は和女を愛くしむ。』

さはあれ、若しや此の叔父の  
子なりし渠と語らば  
はた尚ほ渠が妻と呼ぶ  
女子と言葉を交しなば  
此の家和女のものならず。

吾が言、法命よ』と。さてドラや  
溫和なれば誓ひたり、  
彼女窃かに想へらく  
『有り得べきかは！叔父君の

み心やがて變るらん』。

第貳章

(一)

何時しか幾何の日は過ぎて  
ウイルヤムにしも男の愛見  
産れ出てしがさる程に  
いたく苦しの災禍は  
あはれ落ち來ぬ、渠の上。

日毎に氣落れ父の門  
よざれど父や救せず、  
ドラは儉約しく省き得し  
些少の貯、秘めやかに  
夫婦の許に送りけり。  
誰が送れるか、彼の夫婦  
知らざる程にウイルヤム  
熱病しくなりてあゝ竟に  
收獲時よ、はかなくも

永劫の眠に落ちにける。

(二)

折からドラ女、メーリーの  
許をば訪ひつ、メーリーは  
坐ながら、眼涙ぐみ  
己が幼兒眺めつゝ  
想ひぬ、ドラを悪しざまに。

ドラ女到りて言ひけらく

「今日まで妾は叔父君の  
仰せに従ひ居たりしが  
想ひ出づれば此の身こそ  
浅ましき事してけりな。

爾ウイルヤムの身の上に  
僕く起りし禍事の  
萌苗や總て、愚かなる  
あはれ妾の身によりて  
生れ出でにし事なれば。

然こそ有らめど、  
逝きにし彼の君、  
彼の君擇びし女子の爲  
此の孤兒の爲にとて  
妾は御身を訪ひ侍る。

此の五年の程にして  
爾くいたくも豊かなる  
成熟の歳やなほ會て  
無かりし事を御身とく

然こそは知りておはすらめ。

されば、此の身に幼兒を  
伴れて住かせね、許容えば  
妾は渠を叔父君の  
見まさん處に置きてんよ  
小麥や生ふる圃の中。

叔父君、豊かの收獲を  
悦び眺めておはす時

ふとその幼見給ひて  
現世を去りし渠の爲  
慈愛しますらん様にこそ。

第三章

(一)

ドラは幼見件れ立ちて  
小麥の圃を過りゆき  
辿り到りて坐を占めぬ  
種を蒔かずて嬰粟あまた

繁り生ひたる丘の上。

遙か離りて彼の農翁  
歩み入り來つ、圃の中、  
されど認ざりき、下男等の  
誰しもドラが幼見を  
卒て待つ由を告げざれば。

ドラ立ち上り叔父の邊に  
往かんとせしが躊躇ひつ、

刈收者は麥刈りつ、  
聽て夕日や沈みゆき  
昏は蔽ひぬ、四面の陸

(三)

されとドラ女はその朝  
環り來れる折からに  
そと起き出て、幼兒を  
抱き、迎らひ、坐を占めき  
再び彼方の丘の上。

近邊に生ふる百草の  
花もて小の花圈の環  
自身造り、幼兒の  
帽子に纏ひぬ、叔父君の  
眼に愛しく見えなんと。

斯くてよ、圃に彼の農翁  
迎り入り來し折からに  
あはれドラ女を認めしが  
稼ぎいそしむ下男等を

離り來りて言ひけらく。

「昨日何處に居たりしぞ？  
そは誰が見なる？何事を  
和女なせるや？しか爰に」  
ドラ女一さわ俯向きて  
いとも靜かに答へける。

「此はウイルヤムの幼見！」と  
アラン言へらく』さて此の身

禁めざりしや、然る事を  
禁めざりしや、和女ドラ』  
彼女再び言ひけらく。

「妾が身のみは如何にとも  
いざみ心の自由にならば――  
さはれ、此の見を伴れまして  
現世を去りし渠の爲  
あゝ慈愛しみ給へかし！」

聽てアランは言ひ出てぬ  
「吾こそ疾くも解りつれ  
此等は、和女と彼處なる  
女子が共に、淺簿に  
企みたりし陰謀なるを。」

此の身や已が爲すべきを  
知らぬことや、如何て爾  
和女の口を俟つべきぞ！  
既に和女こそ知り居らめ

吾が言の葉の法命なるを。

尙ほ斯くそをば輕しめし、  
然はなせ——吾はその童  
伴れ往くべければ——されど  
和女は疾くも歸り去れ  
もはや必ず吾を見ぞ。

言ひつゝ渠は、聲高く  
叫びていたく悶くなる

童を携へ伴れ去りつ、  
花もて造りし花圈の環  
散りぬ、ドラ女の足の許。

處女はその身の手に  
打ち伏せたりき、己が顔、  
折しも童の哭聲や  
圓の彼方ゆ聞えける  
漸次に遠く隔りつ。

ドラ女はやをら垂低れつ、  
その身初めて來し頃の  
彼の事情を思ひ出て  
あるは、過ぎにし種々の  
事ども浮べぬ、胸の中。

彼女打ち伏し秘やかに  
暫時泣きけり、さる程に  
刈收者は麥刈りつ  
聽て夕日や波みゆき

昏は蔽ひぬ、四面の陸。

第四章

(一)

ドラ、メーリーの許にゆき  
立ちぬ、その家の門の下  
メーリーわか見のドラの手に  
有らぬを認め、寡婦の身  
助けし神を讚美へたり。

ドラ言ひけらく「叔父君は  
幼児伴れて往ましつ、  
さはれ、メーリー！妾をば  
み許に置きて稼がせぬ  
叔父君言ひき、妾を見じと」。

時に、女女子の答ふらく  
「あはれ然ること夢にだに  
なし得べきやは、自身の  
災難ごとを御身の上

負せまゐらせん憂き事を。

今しも妾は想ふなる

翁に妾見を委ね得じ

幼見自然と無情を

見習ふならん、母をさへ

忘るゝ如くなるめれば。

いてや御身と共に往き

妾は妾見を受け復し

渠を伴ひ歸り來ん

なほも翁に願はなん

御身を元に復しねと。

さるを翁の拒みなば

時よ、爾と妾と一家にて

棲ひ、ウイルヤム残したる

見の爲め稼がん、渠生ひて

妾等を助くる歳までは。

第五章

(一)

二人の女子は接吻し  
 伴れ立ち到りつ賤づ家に、  
 鑿はづせる扉の隙ゆ  
 闕窺み認めぬ、彼の童  
 抱けるを、祖父が膝の間。  
 翁は己が腋の下

童引き入れ手を叩ちつ  
 頬を叩きつ、舉動や  
 恰も愛兒を愛しむ  
 情け厚き人の如。  
 童、かよわく伸びあがり  
 アランの時計ゆ垂れ懸り  
 爐の火に燦く金印を  
 ねだりき、いとも邪氣なう  
 片言まじりの聲音にて。

(二)

女子等入りつ。有繫に  
童は、母を見たる時  
泣きぬ、み許に往かなんと、  
アラン童を置きければ  
メーリーやをら言ひけらく。

「あゝ、舅君よ——爾よふを  
許容し給はゞ——妾は未だ

妾が爲、或るはウイルヤム  
將た此の童の爲にとて  
來らざりしよ、依頼事に。

さはれ、ドラ女の爲にとて  
今しも來つる、大人の姪  
元に復して給はりね  
姪君こそは大人の身を  
愛でまゐらせらるや切なるよ。

あゝ大人！妾が夫ウイルヤム  
 逝きにし時や怨みなく  
 和ぎ死にし臨終時  
 此の身が静かに問ひけるに  
 あはれ彼の君言ひけるよ。

妾を爾く娶りしを  
 夢だに悔ゆる能はずと  
 妾は能くも堪忍びたる  
 貞實に仕へし妻ぞとぞ

さは云へ大人よ、渠言ひし。

斯く父上を苦しむる  
 悪しなど、更に言ひけらく  
 『神よ、父をば幸まひね！  
 父や知らざれ！吾が經たる  
 憂はしかりし辛慘を！』

さて妾が夫は、渠の顔  
 そむけつ、竟に死りき

あはれ幸さちなわらはの妾めかけかな！  
兎うさぎまれ、今いまはもあゝ大人おとしよ  
妾めかけ見みを此この身みに賜たまへかし。

大人おとしは此この兒こを無情つれなさの  
性さがとや養育はぐくみ給たまひなん  
竟つひには此この兒こ、亡父なきちちを  
儚はかばかく輕蔑あやうみいやしむる  
憂うれきごとをこそ見習みならはめ。

將ほどたなほ大人おとしの姪めがねにます  
ドラ女おんなをあはれ元もとの如ごと  
復かへし給たまはり、何なにごととも  
なべてをあはれ元もとの如ごと  
有あらしめましね、あゝ大人おとしよ。

(三)

爾しかメーリーりーの言いひけるに  
傍たかのドラは面蔽おもひひ  
しばし沈點おちしぬ、室へやの中ちゆう、

やがて翁は突爾に  
驟泣にぞ泣き出でつ。

「あゝ過ちぬ…過ちぬ

此の身や吾子を殺したり

此の身や渠をば殺したり…

さはれ渠をし愛でるしぞ—

あはれいとしの己が見や。

神よ、み恕し賜はりね！

あゝ此の吾を—己が身を  
過ちたりな、過ちぬ  
いざ諸共にオ、吾に  
接吻なしね、吾が見等よ。』

此の時、二人の女子等は

翁の首に絡みつゝ

接吻なしつ、數度

何時しか翁の頑固心は

溶けぬ、總てを悔い出でて。

さはれドラ女や獨身の  
生活送りぬ、死する道。

—テニソン卿原作—



あゝさる程に愛しむ  
念は復りき、百増に、  
三時が程や孫をば  
抱きて翁は啜泣  
ウイルヤムをし憫びつ。

(四)

斯くて四人は諸共に  
一家に接ひ、年たちて  
メーリー又の配偶迎びつ、

新婚を祝して

高き天上の園の中  
句ふ、金色、濃紫  
紅、緑、白、黄色  
はた藍色の星の華。

それにも優る彩の星

あはれ優しく笑み出でぬ。

廣き下界の圃の中  
薫る、蒲公英、堇花  
卯花、撫子、燕子花  
菊、女郎花、萩の花。

それにも優る妙の花  
あはれ懐しく咲き出でぬ。

(三)  
 縁の風に誘はれて  
 匂ひ出づれば玉樓も  
 埴生の小屋も和ぎて  
 愛しき胡蝶ぞ舞ひて飛ぶ。

あはれ優しき星の花  
 あはれ懐しき花と星。

(四)

しかく彩よき星の影  
 しかく妙なる花の姿  
 仰ぎまゐらす今日の日や  
 目出度事の極みなれ。

祝はずてやは此の席  
 壽がずてやは此の宴

——さる君の許へ——



アルリン公の嬢

山國指して急ぐなる  
領主叫びぬ「オ、船子！  
急げよ、急げ！此の渡船場  
余等を渡さば與へなん  
汝に銀貨一ポンド」。

『さて爾暗く逆巻ける  
ゴイルの湖を渡らんと』

願ふは誰ぞや？」「ヲ、余は  
アルヴァ島領主、此なるは  
アルリン公の嬢なるぞ。

余等は共に、嬢の父  
遣はす追手をあはれ三日  
避けしが、若しも谷間に  
出遇はゞヒースの叢を  
染めて流れん、余が血潮。

追牛の騎士急ぎつゝ、  
脊後に寄すよ足の跡  
渠等が見なばあゝ嬢の  
戀の君や殺されて  
誰か慰めん華麗新婦。

剛雄しき島人應へける

「往かなん、領主よ、漕ぎ出でん  
御身の燦く銀貨を  
望むにあらねど御身をば

誘ふ女子の爲にこそ。

此の身は誓ひて、華麗しき  
鳥、危険に躊躇はぬ  
そが如、いかに濤白く  
猛り荒ひて寄するとも  
御身等渡さん、此の渡船場。

折から暴は突爾に  
激しくなりつ、水の精

追牛の騎士急ぎつゝ、  
脊後に寄すよ足の跡  
渠等が見なばあゝ嬢の  
戀の君や殺されて  
誰か慰めん華麗新婦。

剛雄しき島人應へける

「往かなん、領主よ、漕ぎ出でん  
御身の燦く銀貨を  
望むにあらねど御身をば

誘ふ女子の爲にこそ。

此の身は誓ひて、華麗しき  
鳥、危険に躊躇はぬ  
そが如、いかに濤白く  
猛り荒ひて寄するとも  
御身等渡さん、此の渡船場。

折から暴は突爾に  
激しくなりつ、水の精

叫<sup>さ</sup>けび高<sup>たか</sup>鳴<sup>な</sup>り、天<sup>そら</sup>の闇<sup>やみ</sup>  
仰<sup>あや</sup>げる二<sup>ふたり</sup>人<sup>り</sup>や語<sup>かた</sup>りつゝ  
愁<sup>うれひ</sup>の色<sup>いろ</sup>を現<sup>あら</sup>はしぬ。

暴<sup>あらし</sup>風<sup>かぜ</sup>は愈<sup>いよ</sup>よ暴<sup>あらし</sup>び來<sup>き</sup>て  
い<sup>い</sup>やもの凄<sup>すこ</sup>し、夕<sup>ゆふ</sup>の姿<sup>さま</sup>  
時<sup>とき</sup>しも甲<sup>かち</sup>冑<sup>ちゆう</sup>身<sup>み</sup>に具<sup>ぐ</sup>せる  
騎<sup>つば</sup>士<sup>し</sup>、谷<sup>たに</sup>間<sup>ま</sup>を下<sup>しも</sup>に寄<sup>よ</sup>せ  
近<sup>ちか</sup>く響<sup>ひび</sup>さぬ、馬<sup>うま</sup>蹄<sup>つづ</sup>の音<sup>ね</sup>。

女<sup>をんな</sup>子<sup>こ</sup>叫<sup>こぼ</sup>びつ「オ、急<sup>いそ</sup>げ！  
汝<sup>い</sup>急<sup>いそ</sup>げよ、如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>ばかり  
暴<sup>あらし</sup>風<sup>かぜ</sup>や妾<sup>めかけ</sup>等<sup>ら</sup>を襲<sup>おそ</sup>ふとも  
向<sup>むか</sup>はん、空<sup>そら</sup>の暴<sup>あらし</sup>の中<sup>うち</sup>  
怒<sup>いか</sup>れる父<sup>ちち</sup>に會<sup>あ</sup>はんより』。

小<sup>こ</sup>舟<sup>ぶね</sup>、離<sup>はな</sup>れつ暴<sup>あらし</sup>の陸<sup>りく</sup>  
小<sup>こ</sup>舟<sup>ぶね</sup>、進<sup>すす</sup>みつ暴<sup>あらし</sup>の海<sup>うみ</sup>  
時<sup>とき</sup>によあはれ！人<sup>ひと</sup>間<sup>ま</sup>の身<sup>み</sup>の  
漕<sup>こ</sup>ぎゆき難<sup>かた</sup>く手<sup>て</sup>にあまる

暴風襲ひぬ、舟の上。

されど渠等は速く

漲ぎる水の凄まじき

吼聲の中に漕ぎ出でつ。

アルリン致命の岸に達さ

憤怒は移りぬ悲哀と。

渠は怖き暴と闇

透して沖に己が娘を

認めぬ、愛しき片手にて

戀の君を抱きしめ

片手を揚げて救ひ乞ふ。

アルリン悲しみ叫びけり

「歸り來れや！歸り來ね！

暴の流を横ざりて、

山國の領主許さなん

あはれ余が娘よ、余が娘！』

そは無益なりし、聲高き  
巨濤どうと岸を擲ち  
歸還あたはず、往きもえず  
見る見る舟は覆へり  
公は残りぬ、嘆きつゝ。

—トーマス・キヤンネル原作—



手を把りて

天崖つらなる山の峽  
静肅に微笑む文學の華  
同じ目的に手折りたる  
三年は過ぎぬ、卒業期。  
靈しき光明、懐しの香  
研究の坂に仰ぎつゝ、  
共に手を把りいそしみて

折りしや同じ幹の華。

余が學友！  
調べよ、いざ共に  
親睦の詩、別離の曲。

天美や榮ゆる春と夏  
神秘や洩る、秋と冬  
同じ山路に辿りたる  
三年は過ぎぬ、卒業期。

共に手折りて集めたる  
蕾ながらの枝の束  
文學界の野邊に出て立ちて  
翳すや近し、學才の華。

余が學友！  
奏てよ、いざ共に  
理想の詩、別離の曲。

世界に深し文學の華

世界に遠し學才の極  
將來に險し絶壁の岸  
將來に暴し大洋の波。

余等は若き武者よ  
今しも勇める馬の上  
榮光の光明に照されて  
學才の戦の門出かな。

余が學友！

歌へよ、いざ共に  
希望の詩、別離の曲。

—學を終へて學友に別る、さ—



呪咀の焰

其一

夢語の卷

(一)

清き微風そよそよに  
緑色美さ若葉の上  
やさしく渡り、さく川の  
さく浪ゆかしき朝の曲

静かに調ぶる頃よ。

アダム覺めてそれとなく  
尙も眠れるイブの方  
かへりみれば常ならぬ  
憂雲纏へり、彼女の顔  
譬へば春の曙の花  
霞かゝれる薔薇の花。

アダム静かに手をかけて

揺すり起せば彼女いたく  
物に怖ぢたる憂き姿  
やをら涼しき眼を開き  
かよわき胸を撫りつゝ  
聽て語りぬ昨夜の夢。

「妾が生命の脊の君よ  
いと思はしき夜の影  
失せて跡なく今日爰に  
常に變らぬ妾が君の

あはれ懐しき顔の笑  
再ひ見るこそ嬉しけれ。

想ひ浮ぶるそれだにも  
心根亂れ、毛やよだつ  
あな恐ろしき昨夜の夢  
誰が聲音とわかねども  
妾が耳の邊いと近く  
呟き出づる聲聽けば。

「無情のイブよ起き出でね  
 月や静かに星笑まひ  
 風は涼しく空清く  
 夕の光景の靈しき哉  
 ナイチングールの妙の曲  
 聴くものなくば榮光ぞなき。」

緑の柳葉よ、眉の姿  
 紅の薔薇よ、頬の艶  
 さて美はしき汝が姿

垣間みなんと終夜  
 えもまどろまぬ星の眼  
 あはれと想はゞ起き出でよ。」

聲や正しく脊の君の  
 實に懐しきそれと社  
 妾は急ぎ起き立ちて  
 亂るゝ胸を抱きつゝ  
 心も空にゆくりなく  
 御身の行方を追ひまつり。

智恵の木蔭に迎へば  
 晝には優る花の色  
 香やいと薫しく。  
 いぶかりつゝぞ眺むれば  
 傍に佇む影一人  
 姿あてやかの天人よ。

同じ梢を仰ぎつゝ  
 「あな美はしの智慧の樹よ  
 枝もたわゝに實れども

いましは神に、人々に  
 他見とならば何時しかも  
 重荷の肩を休めえん。

智慧はしかくも陋しきか  
 否ず、人には授けじの  
 御意か、さらば何どもかく  
 此處には植えておはすなる？  
 「天」の禁制の不可思議や  
 いて、汝が肩を休えん」と。

大胆くも臂伸べて  
禁制の實をば怖ぢずとり  
喰みては舌を打ち鳴し  
「あなや尊さ智慧の實よ  
枝にて見しゆいや遙か  
口には甘さ味や。」

人をも神にすといへば  
實に彼の「天」の禁制も  
然ることながら如何ばかり

神のその數増さばとて  
全能のみ光何と減らん  
御心狭きことなりや。

いざや、織女星の如  
いと華車のイブ姫よ  
御身も美味あぢはひて  
入りね、榮光よさ女神の簇、  
狭き地球の檻出て、  
心の自由に天翔り。

星の世界の華の園  
薫に酔ひて逍遙へ」と  
妾が口に美味を  
投げ入れたりしその後は  
夢路に迷ふ心地して  
彼の天人に連れられつ。

舞ひて昇るは雲の空  
遙かに腑るは山と川  
自ら此の身の飛行の

あまりの疾に驚きて  
ふと足許を見し間に  
手引の神は消え失せき。

呼べど叫べど應答なく  
あはや落ち來し地の上  
尙も覺めていぶかしく  
夢の浮き橋迎る時  
清くやさしくなつかしく  
妾が耳に君の聲。

(二)

聴くも思はし夢語  
アダムも痛く驚きつ、  
さはれ正なき怪の夢  
心に染むる想い社  
女々しの鳥澁よるかしと  
やうく氣とり直し。

悲しく、涙さしぐめる  
イブを慰めつ、勵ましつ

旭映え美き野に出て、  
朝の祈禱聲高く  
しばしみ空を仰ぎつ、  
祈りぬ「天」の庇靈を。

胸の憂き雲晴るゝ時  
名も高砂の浦風に  
千歳の松の落葉かく  
年尚ほ若き尉と姥  
それにも似たるアダム、イブ

(一)  
 み空の遠地ゆアダム、イブ  
 いそしみ労働げる光景を  
 御覽じおはし、大神は  
 物に馴れたる老天使  
 ラツファエルを呼び出し  
 いと懇篤の大神言。

其二  
 勅使の卷

樂しき朝の仕事ものす。



「汝等も亦聞きたりし  
 疎ましき昨夜の物音や  
 曩に奈落を脱け出てし  
 魔魁セイタン爲一仕事  
 まがひも非ず、渠が計  
 言ふだに恐ろし計の底。

汝下界に疾く降りて  
 彼の樂園の花の門  
 訪ひて日半の閑話に

夫れとしもなく夢魔等の  
 近づく由を告げ置きて  
 不覺なきやう計らへよ。

(二)

天意を奉ぜる老天使  
 羽袖や輕き秘め飛よ  
 七寶まばゆき天の門  
 瞬く程にすぎ往きて  
 五彩燦く星の世界も

何時しか後に翔け出てつ。

樂園の角、大門の

傍に時つ嵐の上

暫時を憩ひ、天つ神

詔を詩宜せる大法使に

捧す厳しき敬禮を

受けて進みつ、案内なく。

獨しづく緑なす

若葉の森の周囲をば

環りくして美はしき

花の林の此處かしこ

踏み分け着さぬ、玉の露

いたくも深き花の門。

(三)

樂しき朝の仕事終へて

露の軒端に涼むなる

アダム、木の間の蔭より

大御使の影仰視ぎ  
晝餉の支度いそしめる  
イブをば近く呼び寄せつ。

榮光よき珍客迎へんと  
互に窃かに謀し合ひ  
うなづき合ひつゝ、妹は背戸  
手やいとがはしく木實取、  
脊は門の邊に出て立ちて  
言うやしくしく出て迎へ。

(四)

静、ラツファエル大天使  
薔薇の花の床の上  
据へたる青き芝机  
向ひて苔の椅子に倚り  
今しも二人がまゐらする  
自然の美酒、佳き肴  
さこし召されて舌打ちし  
すがくしげに、心地よげ  
笑ひ興ずる聲高く、

或ひは低く、何時しかも  
人倫より語り出て  
天の眞道に及ぼしつ。

天の眞道に背きはて  
人倫の敵となりたりし  
大天使王、あるはまた  
徒黨の神の墮落ゆ  
新しの世界を創造る迄  
説さぬ、それ等の因と果。

しかく語りて、今日の日の  
神寵あつき人の胸  
夫れさへ明日は儚くも  
いと恐ろしき毒の蛇  
宿らんことも分かすなど  
魔鬼近づくを諷し終へ。

尙ほ四方山の雑談  
時移らひて、入相の  
金矢銀矢の日の光

一日の名残惜む如  
下界彩る夕まぐれ  
果しぬ、天の大使命。



其三

別居の巻

(一)

天界の上にはエウリエル  
守れる鋭き眼あり、  
下界の邊にはゲブリエル  
磨ける利き劍あり、  
まして今はた警告の  
ラツファエルの言葉あり。

魔魁セータン如何ばかり  
 強き魔力のあらばとて  
 斯るかためを抜きなんと  
 願ふ想や譬ふれば  
 林と繁る、針の山  
 越さんのそれよ、鳥澁の業。  
 さるを、不敵のセータンは  
 如何で計畫止めんや  
 撓まず、飽かず、只管に

最初の念を徹さんと  
 獨思慮を凝しつゝ、  
 千々にも碎く胸の中。  
 ゲーブリエルの確守にて  
 夢く樂園追はれたる  
 八日の後の夕の空  
 狭霧の深く立ち込める  
 朦朧にまぎれて潜りたり  
 千仞の岩根の清水の中。

斯くて再び窈やかに  
靈樹生ひ立つ樹々の蔭  
現はれ出て、塵甜むる  
今しも毒蛇の躰の内  
宿りて姿を穩しつゝ  
朝の來るを待ちにける。

(二)

應て朝に、アダム、イブ  
妹脊は告天子の歌につれ

起き出て、常の禮拜に  
天の庇靈、祈禱して  
今日の一日の計營の  
評議せんと額寄む。

(三)

「背の君アダムよ、妾等は  
手をととり交はし、連理の枝  
清き樹陰に亂れ散る  
落葉を拾ひ小草刈るも

魔魁セータン如何ばかり  
 強き魔力のあらばとて  
 斯るかためを抜きなんと  
 願ふ想や譬ふれば  
 林と繁る、針の山  
 越さんのそれよ、鳥群の業。

さるを、不敵のセータンは  
 如何で計畫止めんや  
 撓まず、飽かず、只管に

最初の念を徹さんと  
 獨思慮を凝しつゝ、  
 千々にも碎く胸の中。

グープリエルの確守にて  
 儂く樂園追はれたる  
 八日の後の夕の空  
 狭霧の深く立ち込める  
 朦朧にまぎれて潜りたり  
 千仞の岩根の清水の中。

斯くて再び窈やかに  
靈樹生ひ立つ樹々の蔭  
現はれ出て、塵甜むる  
今しも毒蛇の躰の内  
宿りて姿を穩しつゝ  
朝の來るを待ちにける。

(二)

應て朝に、アダム、イブ  
妹脊は告天子の歌につれ

起き出て、常の禮拜に  
天の庇靈、祈禱して  
今日の一日の計營の  
評議せんと額寄む。

(三)

「背の君アダムよ、妾等は  
手をととり交はし、連理の枝  
清き樹陰に亂れ散る  
落葉を拾ひ小草刈るも

實に極りの快樂よ  
されと力や限あり。

手傳なさん子孫の  
出て來ぬ程に夕となく  
晝とも非ずいそしめど  
み園や廣く隅の方  
掃ひ淨めん事だにも  
覺束なさの仕事なるよ。

何時まで斯くて在らなんの  
あれれ御身の意にや、  
二人手をとりに在ればこそ  
優しき蝶の羽風にも  
さくやぎあひて想ひなく  
移る月日を過すなれ。

貴き光蔭惜みなば  
今日より別れて右ひだり  
御身は此方の池の面

浮びて翳しね藤の波  
此身は彼方の森の中  
飾らん薇薔の花の環

(四)

道理ありげに聞ゆれど  
イブや婦人よ、智慧浅く  
何時しか早も先つ頃  
天つ詔を旨のまゝ  
ラツファエルが諷したる

注意をも忘れけん。

(五)

「吾妹よ、御身の心がけ  
優れることや喜ばし  
さはれ、暫時の寸陰も  
惜みていそしみ嫁がんは  
吾が大神の御意に  
違反さまつらん恐あり。

御身が、共に住居する  
變化なきをば倦み初めて  
暫時獨居おもひ立ち  
をかしき變化の浪の華  
平和の中に求めんの  
願ひなりせば逆はじ。

さはれ、吾妹よ、聽きましね  
只だ心得の胸の中  
守るべき哉、先つ頃

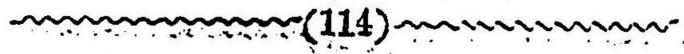
大御使の宣ひし  
悪魔の上や暫時だも  
忘れ得べきの事ならず。

靈しく妙に不思議しき  
悪魔の術を用ゐつゝ  
吾等を邪道に誘かんとす、  
互に別れて住はんは  
渠等が爲に無上の  
しか好き機會となるならめ。



「大御使のみ言葉に  
偽りおはす事なくば  
實に妾等の周囲には  
常に悪魔の毒の影  
微かに繁に纏へるや

思慮や深き脊のアダム  
言葉静かに語りしも  
一徹勝ちの女の心  
反りてそが爲め激しけん。



あはれ吾等の身の周囲  
常に悪魔の毒の影  
夕の靄の蔽ふ如  
微かに繁に纏へるを  
夢路の間の片時も  
心な緩べそ、忘れぞよ。

(六)

危険の恐、多かれは  
イブの發議消さなんと

疑ひまゐらす術あらじ。

若し左もあらば如何てかも  
樂しかるべき妾等の身、  
此處樂園や名のみにて  
地獄と差別あるまじく  
吾が大神の稜威にも  
關るならんの道理よ。

假令や如何なる惡魔等の

此の身の周圍纏ひつゝ、  
誘惑つよき眼にて  
窺はゞとて、妾が心  
動かざりせば何憂ひ  
はた何事を怖るべき。

曾て聞きしよ、誘惑の  
試金石の辛き邊に  
觸れし朝に非ざれば  
いかに自身真心の

強固を自覺り侍るとも  
さこそ誇るに足らざれと。

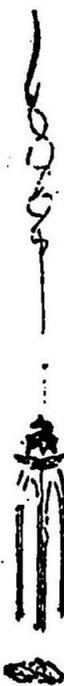
萬の物の靈長としも  
生れ出てにし人の身よ  
彼等惡魔の低き聲  
聞きて直ちに怖れんは  
吾が大神の大威力  
疑ひまつるに似たる哉。

斯くしも固く思ひ詰る  
イブの希望に逆ひて  
止め消さんも愚かしく  
あまりに女々しき術なるを  
まして彼女なほ容易は  
己が意曲ぐる姿もなし。

アダムは暫時眉の間  
不安の皺を寄せつゝも  
彼女の言葉に従ひつゝ、

あゝ時來りぬ、大魔王  
大の魔力を逞ましく  
打ち揮ふべき時は來ぬ。

—「矢樂園」の一節の意をとりて—



孤兒に寄す

可憐なる孤兒  
余が同情熱き孤兒  
汝は如何でかしかく生れ來し  
見るさへ悲しのあゝ孤兒よ。

平和を夢むる暖かき  
母の懷中  
父の樂園

知れりや、悲しのあゝ孤見よ。

愛情溢るゝ同胞の笑  
汝は何時か見し、  
熱情燃ゆる同胞の手に  
汝は何時かは抱かれし。

母の乳房に稚子等が  
いと安樂く熟睡る夕  
露草かたしく牀の中

唯だ孤身、何をか夢む。

母の慈愛の振袖に  
手をば引かれて稚子等が  
花笑む蔭、鳥謠ふ野に  
胡蝶追ふ光景を如何に眺むる。

艶なき蒼き頬  
涙ひそめる其の眼  
あゝ余が同情の心に

知れりや、悲しのあゝ孤兒よ。

愛情溢るゝ同胞の笑

汝は何時か見し、

熱情燃ゆる同胞の手に

汝は何時かは抱かれし。

母の乳房に稚子等が

いと安樂く熟睡る夕

露草がたしく牀の中

唯だ孤身、何をか夢む。

母の慈愛の振袖に

手をば引かれて稚子等が

花笑む蔭、鳥謠ふ野に

胡蝶追ふ光景を如何に眺むる。

艶なき蒼き頬

涙ひそめる其の眼

あゝ余が同情の心に

悲哀の使者とぞ。――

紫深き唇に

謡ふ汝が無邪氣の唄

悲哀の韻

……竟に余が耳を破りぬ。

可憐なる孤兒、汝は如何に

何をか樂しみ

何をか望み

嬉しげに戯れ遊ぶ。

母戀しの想

父暮しの念

小き胸を破りしにや

果た非ずとにや。

汝は悲哀のその中に

苦しく外見を装ふにや

はた知らざるにや、身の運命

あゝ知らざるべし、知らざるべし。

汝が生れ來し其の日より  
母は既に汝が爲に生さず  
父また汝が爲に在さず  
同胸だにも無き孤兒よ。

あゝ渠をして孤兒と  
親やなしたる  
社會やなせる

はた神のみ掟か。

人の子なべて神のみ子

さるを！さるを！

万能なる神よ

何ぞ孤兒を救ひ給はぬ。

譬ふればあゝ汝が運命  
寄る邊渚の遠さく  
大洋の廣面に

さまよへる若き孤蝶が身。

かよわき翅ひらくと  
罪なき胸に

あたたかき希望もて  
飛べ！心猛く。

いかばかり美しき波の華  
汝をば招くとも心して  
少時も息ひぞ

羽を閉ぢぞ。

沖の孤島のいたくも聖さ  
神の樂園に

やさしき微笑漏せる  
蓮の床にしも息へ。

其處には聖く暖かさ  
慰籍の源泉  
希望の光明

汝が爲に溢れたり。

さはいへ、神の樂園  
遙かに遠き彼方よと  
悲しき誤解ひなせそ  
心惱みぞよ。

汝が心靈平安に息ひ  
眞道に悟り入る朝  
汝が心の中にぞ

神の樂園は現はるゝ。

往け！その神の樂園に  
母おはし

父まして  
歎樂もて汝を迎へ給ふ。

戯れよ遊べ！  
同胞は汝が手を把りて  
幸多き野の邊に

聖き流れをば與へん。

やさしき花の笑に  
鳥うたふ清き音に  
打ち合れて語へ！叫へ！  
快樂しき調べを。

其の朝ゆ汝はしも  
新しき希望  
光をはなち出て、

いかてかは嘆きの胸あらん。

その身の運命な怨みそ  
母戀ふ念  
父慕ふ胸  
疾く捨て、想はざれ。

誰かは汝を孤兒と呼ぶ  
心平安く、健かなれ  
聖き汝こそ

悲想の中に足踏みなせそ。

注意よ、怠りぞ。

汝が心の中に

神の御園

神のみ國あるを。

外見のみ貴き人の世の

苦痛に泣きぞ

「孤兒」に悲しみぞ

神のみ恩愛あつき見。

神は汝に將來を與へぬ！

楽しく心靈を修磨け

眞道に進め

神の御園に疾く遊べよ。

愛あつき神の授け給ふ

心靈を穢し

將來を見捨て

疾く歡樂を得よ。

万能なる神  
恵あつた神  
疾く導き給へ  
心靈弱き孤兒を。

慰藉の源泉  
希望の光朋  
溢るる樂園のその中へと

悲衰の闇路にさまよふ孤兒を。

神は汝に將來を與へぬ  
樂しく心露を修磨け  
眞道に進め  
神の樂園に疾く遊べよ。

(三十六年秋作)



時移らへは

時移らへば現世の

草木よ人の差別なく

降り往くなり老の坂

潜り往くなり墓の門。

さはれ御身の頬の笑

見てし以來余が胸に

繁り生ひたる戀の草

何時かは枯れん枯るべしや。

御身が愛の手に秘むる

懐かしき鋭鎌に刈られずば、

優しき君が胸の邊に

仰ぐを得ずば、愛の華。

ふる郷集終り

明治三十八年十二月一日印刷  
明治三十八年十二月四日發行

定價金貳十錢

著者 入江 雅次 郎

發行者 大月 隆

印刷者 青木 弘

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
株式會社秀英會第一工場

東京市神田區錦町一丁目十六番地  
文學同志會

(電話本局千〇九十三番)

大阪市江戶堀上通 文學同志會大阪支部

廣島市西橫町 文學同志會中國支部



著作權所有

發兌元

明治三十八年十二月十七日印刷  
 明治三十八年十二月三日發行

定價金貳十錢

著作權所有

發兌元

著者 入江 雅次 郎  
 發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地 大月 隆  
 印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目 青木 弘  
 印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目 株式會社秀英會第一工場  
 東京市神田區錦町一丁目十六番地 文學同志會  
 大阪市江戶堀上通 文學同志會大阪支部  
 廣島市四橫町 文學同志會中國支部  
 (電話本局千〇九十三番)

文學同志會出版圖書目錄

|               |               |               |               |               |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 美<br>妙        | 人生の氣力         | 人生の初旅         | 人生の老旅         | 人生の悔悟         | 人生の片影         | 人生の目的         | 人生經濟學         |
| 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 |
| 人生の情事         | 吾人の生活         | 山高水長          | 風月萬象          | 斷巖絕壁          | 枕頭の山水         | 悲哀の快觀         | 萬情萬眉          |
| 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價十六錢<br>郵稅四錢 |

|               |               |               |               |               |               |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 最近國家社會主義      | 斬奸狀           | 精神と力量         | 虛心談           | 活學談           | 活精神           | 活禪錄           | 禪學斷片          | 聖僧道元          |
| 定價六十錢<br>郵稅八錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅六錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價五十錢<br>郵稅六錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 |
| 日佛教拾二傑傳論      | 馬琴妙文集         | 滑稽妙文集         | 戲曲妙文集         | 吞氣文集          | 高等艷麗文集        | 立身の事蹟         | 研學の順序         | 青年の將來         |
| 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價卅五錢<br>郵稅六錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 |

|               |               |               |               |               |               |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 作文指南          | 山水記事論說文       | 高等記事論說文       | 偉人の膽力         | 偉人の生長時代       | 頓才の詩人         | 深窓の佳人         | 婦人實務錄         | 女子講本          |
| 定價廿五錢<br>郵稅六錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿二錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅二錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 |
| 活戀            | 戀と死           | 墳墓の地          | 失策の半生涯        | 成功秘訣          | 天籟萬丈          | 小哲學           | 珍鳴長明海道記       | 理想の大臣         |
| 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價卅五錢<br>郵稅八錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價十五錢<br>郵稅二錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 |

|            |            |            |            |            |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 心學迷悟篇      | 心學道義篇      | 心學人間篇      | 心學道體篇      | 心學養性篇      | 學生の苦心      | 詩の神        | 心識活談       | 英雄の片影      |
| 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 |
| 心學性理篇      | 心學明德篇      | 心學靈性篇      | 俳流の女神      | 箴言         | 高等秀才文集     | 奇僧の片影      | 高等才媛文集     | 風彩と審美學     |
| 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 |

五

|             |             |             |            |            |            |            |             |             |
|-------------|-------------|-------------|------------|------------|------------|------------|-------------|-------------|
| 無能の天下       | 人情の後見       | 戀愛の精神       | 理想の政黨      | 軍隊の側面      | 成效者の苦學     | 加賀の千代      | 哲學要領        | 禪學の奧義       |
| 郵定價<br>四廿錢  | 郵定價<br>六三十錢 | 郵定價<br>六三十錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>六五十錢 | 郵定價<br>八五十錢 |
| 弱者の臨終       | 戀愛の文豪       | 婦人の情力       | 自然界的審美     | 文學の審美      | 人生の審美      | 吾家の憲法      | 社會學と哲學      | 社會學講義       |
| 郵定價<br>四三十錢 | 郵定價<br>六三十錢 | 郵定價<br>六三十錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>四廿錢 | 郵定價<br>六五十錢 | 郵定價<br>六五十錢 |

四

|               |               |                  |               |               |               |                 |               |                |
|---------------|---------------|------------------|---------------|---------------|---------------|-----------------|---------------|----------------|
| 全<br>三學年用     | 全<br>二學年用     | 中等國語讀本<br>字引一學年用 | 全<br>四學年用     | 全<br>三學年用     | 全<br>二學年用     | 小學高等科<br>字引一學年用 | 征露詩集          | 處世の歌           |
| 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿四錢<br>郵稅四錢 | 定價廿四錢<br>郵稅四錢    | 定價十五錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅二錢 | 定價二十錢<br>郵稅二錢 | 定價二十錢<br>郵稅二錢   | 定價十五錢<br>郵稅四錢 | 定價三錢五厘<br>郵稅二錢 |
| 人生と山水         | 忍ぶ草集          | 百字文集             | すみれ集          | 玉琴集           | 殘花集           | 高等美文資料          | 全<br>五學年用     | 全<br>四學年用      |
| 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢    | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅六錢   | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢  |

|               |               |                |               |               |               |               |               |               |
|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 近松妙文集         | 美文組立法         | 中等作文組立法        | 秀才記事論說文       | 馬琴旅行文集        | 心<br>琴        | 女子美文斷片        | 高等美文斷片        | 審美學要義         |
| 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢  | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅六錢 | 定價廿四錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 |
| 軍歌集           | 軍人と膽力         | 社會學と事業         | 社會學問答         | 名流の家憲         | 立身冒險談         | 芭蕉妙文集         | 爲永妙文集         | 西鶴妙文集         |
| 定價十二錢<br>郵稅四錢 | 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價七十五錢<br>郵稅十錢 | 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價卅五錢<br>郵稅六錢 | 定價三十錢<br>郵稅六錢 | 發賣禁止          |

|               |               |               |               |               |               |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| テニソンの詩        | 琵琶歌妙文集        | 謠曲妙文集         | 婦人の美觀         | 婦人と家庭         | 婦人の使命         | 婦人と文學         | 英雄僧日蓮         | 新婚旅行          |
| 定價六十錢<br>郵稅八錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價三十錢<br>郵稅四錢 | 定價五十錢<br>郵稅六錢 |
| 不如歸集          | 靜思斷片          | 殘雪集           |               |               |               |               |               |               |
| 定價二十錢<br>郵稅四錢 | 定價廿五錢<br>郵稅四錢 | 定價十二錢<br>郵稅二錢 |               |               |               |               |               |               |



